

近代日本の教育と青年

干潟地域の井上勇治郎を中心に

鈴木秀幸

Education and Youth in Modern Japan: INOUE Yujiro from the Hikata Region

はじめに

- ① 地域社会の変貌
- ② 修学のように
- ③ 井上勇治郎の教育
- ④ 若き教育者石毛辰五郎について
むすび

【論文要旨】

日本が近代を迎えた時、人々はどうのように思考し、行動したのか、ということを探明することは、きわめて大きな課題である。本稿は、その実態をリアルに把握し、追求するために、地域の社会状況や生活事情を取り上げることとした。とりわけ、そこにおいて次世代を担う人達、つまり青年達に着目した。さらにそれら青年の行動を追求していく中で、地方と中央（東京）との相関性をもかいまみようとした。

具体的には、筆者が、かつて木村礎氏を中心とする「大原幽学とその周辺」研究、あるいはその前後の寺子屋・和算研究等々で深く関わった東総地方を対象地域とした。とくに現千葉県香取郡干潟町が主であり、大字万歳（旧万歳村）の井上勇治郎を中心に考察した。

彼が生まれ、育つ中で見開いたものは幕末維新期における地域構造の大きな変貌と価値観の著しい変化であった。またそれに対する性理学、国学等々、さまざまな周囲

の人々の活動ぶりであった。

家庭内、そして近隣町場で教育を受けた彼は、教育によって地域社会の立て直しと発展を図ろうとし、まず公立小学校の開校・運営・教育に尽力した。そのことが軌道に乗ると、次には地域青少年のために中等学校の設立に尽力した。さらに貧民層をも含めた一般村民のために学校的な研究会の開設へと進めた。彼は一方では当時の教育政策（とくに民衆運動に対する教育統制）をかんがみつつも、他方では自ら住み、若きリーダーである地域の状況を直視して、活動したのである。

またその間、自ら東京に遊学、中等教育機関を調査・研究をしたり、あるいは慶應義塾出身の若き青年を教員に招聘するなどした。